The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「菊花の約」 の読解 ： 〈近世的な読み〉の試み
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48409
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「菊花の約」の読解
―〈近世的な読み〉の試み―

飯倉　洋一

日本近世文学研究においては、読解の対象となるテクストを、できるだけ同時代のコンテクストにおいて解釈するという方法意識が研究者の間に浸透し定着している。しかし、同時代のコンテクストの捉え方そのものが千差万別であれば、読みはひとつに収斂しない。〈近世的な読み〉を主張する研究者がそれぞれにまったく異なる読みを提示することはめずらしくない。これは〈近世的な読み〉とはどういう読みのことかがきちんと定義されないまま、自らのイメージで作り上げた〈近世〉を前提に論じられているからか、あるいは別に原因があるのか。

〈近世的な読み〉とは、同時代の読者の読みを再現することであろう。そのためには、テクストの読者層を限定したうえで、彼らの一般的な常識・教養世界を把握し、作者の意図をも汲みながら、典拠と同時代的文脈の両面からテクストに迫っていくことが求められよう。当然、用例による注釈的読みが欠かせない。そうした作業を経て得られた解釈でさえ一つに収斂しないことがありうる。それは我々が現代小説を読んだ時にも、多様な解釈が生まれることから類推できる。多様な解釈が生まれる理由――そのひとつに読者（研究者）の「こう読んでみたい」という〈欲望〉が潜んでいることは否定できない（出原隆俊「仕草という問題」「数研国語通信つれづれ」第五号、2005年）。

一　「信義」

数ある近世文学のテクストの中で『雨月物語』「菊花の約」は、論じられる頻度においても、その解釈の多様さにおいても屈指のものだろう。周知の物語であるが梗概をのべておく（長島弘明『雨月物語の世界』ちくま学芸文庫、1998年を一部変えて引用する）。

> 播磨の国加古の駅に、母と二人で住む丈部左門という清貧な儒者がいた。ある日知人の家を訪ねた折、熱病に苦しむ旅人を救う。旅人は出雲の富田城主塩冶掃部介に仕える赤穴宗右衛門。左門の献身的な介抱で宗右衛門は快方に向かい、二人は意気投合して義兄弟の契りを結ぶ。やがて全快した宗右衛門は出雲に戻ることになるが、左門母子の恩返しに九月九日の重陽の日に戻ることを約束する。約束当日、朝早くから宗右衛門を待つが宗右衛門はやってこない。あきらめて床につこうとした時、すでにこの世の人でない宗右衛門が現れる。宗右衛門は新城主尼子に仕える従兄弟赤穴丹治より幽閉され自刃して亡霊となり約束を果たしたという。赤穴に信義を尽くすべく左門は

妹の嫁ぎ先に母のことを頼み、出雲に下る。左門はすぐに丹治を訪ね、その不義をなじり、その場で斬り殺して逐電した。尼子は兄弟の信義の篤さを憐れみ、左門の跡を追わせなかった。

本編は中国白話小説『古今小説』中の「范巨卿雞黍死生交」の翻案である。おおむね原拠通りだが、いくつか重要な改変部分があり、そこに主題に関わる重要な意味があるとして従来さまざまな議論がなされてきた。それらについては前掲長島弘明『雨月物語の世界』の「菊花の約」にまとめられており再説はしない。ここでは「菊花の約」の〈近世的な読み〉とは何かという議論に限定して進めていきたい。

この有名すぎる一篇が、丈部左門と赤穴宗右衛門との「信義」を描いた物語であるということはほとんどの研究者がみとめるところである。(ただし「菊花の約」の中では「信」「義」「信義」の用い方にある傾向があることに留意して、「信義」を〈信〉〈義〉として個別的に読むべきだという山本和明「〈信〉と〈義〉—「菊花の約」試考」「読本研究」第四輯、1990年がある)その「信義」のあり方に読者が共感・感動するか、違和感を抱いて行き過ぎたものと捉えるかによって読みの方向が変わってくる。研究史は、二人の「信義」を美しく描いた物語ととらえる見方から、「信義」のありかたに疑問を呈する見方へと流れてきているが、それは「信義」という主題を通俗的倫理として退けたいという読み手の〈欲望〉がそうさせているとも思われる。

ふたりの関係を「信義」の極致と見る読み方も、「信義」という観念に囚われた偏奇で迂愚なものとみる読み方も、もともと読み手の主観的・直観的な読みであり、特に〈近世的な読み〉を志向した結果生まれたものではないだろう。にもかかわらず、それらは結果としてどちらも〈近世的な読み〉を主張しうるだけの根拠をそれぞれ持っている。

儒教倫理において、また武士道において「信」や「義」が重視せられ、「義」のために命を捨てることが美徳と認められていたことはいうまでもない。しかし、同時に、そのような建前を観念的に墨守する者が現実社会の前では偏奇に映ることを気質物浮世草子は活写してきた。否、『雨月物語』そのものにさえそれは描かれている。最終話「貧福論」の主人公岡左内は「いと偏固(かたは)なる事あり」と紹介されている(西鶴の『武道伝来記』の解釈においても、武士道を礼賛するか、斜めから見るかという対照的な読みが成立しうるのは「菊花の約」と同様である)。今詳述は避けるが、ここ二十年ほどの研究史の状況を見れば、「信義」の物語から「軽薄」の物語へとその主題の読み方の主流が移ってきており、とくに原拠にはなかった末尾の「咨軽薄(あゝけいはく)の人と交はりは結(むす)ぶべからずとなん」の一文の解釈から、「軽薄の人」は誰かという議論が活発になされている。

だが、「信義」の物語と読む場合に、その「信義」の実質が何であったかのか、また「軽薄の人」という場合の「軽薄」とは何かという根本的な問題は意外に等閑に付されてきた感なしとしない。原拠の語を享けているという理由だろうが、〈近世的な読み〉の再現を試みる時、とりわけ「信義」の語は再検討を要する。

「信義」が主要な経典類に案外見出せないことは山本和明前掲論文に指摘があるが、漢籍においては史書に散見され、日本の儒書においては、たとえば伊藤仁斎『童子問』に見

出すことができる。

> 村甿野夫、商販奴隷の賤しき、或は孝友廉直、天性に出で、士人の及ばざる所の者有り、或は學問に由らずして、信義遜讓、澹泊自治して、慷慨義に赴く者も、亦往往之れ有り（原漢文。傍点飯倉。以下も同じ）

また通俗教訓書にも見出せる。常盤潭北の『民家分量記』巻二「朋友の交」に、「朋友は異親同体とて、信義をもって兄弟となる交也。仮にも約束一言をたがへざるを本とす」と言う（同じ作者の『民家童蒙解』にもほぼ同内容の文がある）。

もっとも秋成にとって、ということはつまり秋成が想定した同時代の読者にとって、「信義」の語は、中国白話小説を通すことで実感の伴う言葉となっていたと思われる。「菊花の約」の原拠「范巨卿雞黍死生交」（『古今小説』所収）自体に「信義」の語があり、秋成が翻案に当たってこれをそのまま用いていることは周知の事実である。だが中国白話小説における兄弟の盟約あるいは「信義」の語は、あの有名な場面を常に連想として伴っていたはずであった。たとえば『古今小説』「臨安里銭婆留発積」における兄弟盟約の場面で、「只説我弟兄相慕信義情願結桃園之義」とあるのは、いうまでもなく、『三国志演義』第一回「宴桃園豪傑三結義　斬黄巾英雄首立功」における劉備・関羽・張飛の義兄弟の桃園の盟約を踏まえているのである。今その部分を引く。

> 念劉備、関羽、張飛、雖然異姓、既結為兄弟、則同心協力、救困扶危、上報国家、下安機黎庶。不求同年同月同日生、只願同年同月同日死。

また『雨月物語』序文に言及される『水滸伝』における豪傑たちの兄弟の誓いもまた『三国志演義』と共通している。第二回、朱武と楊春・陳達の誓いの場面で「不求同日生、只願同日死。雖不及関・張・劉備的義気、其心則同」とされる。同日に生まれてはいなくとも同日に死ぬことを願うという強い結義が、関羽・張飛・劉備の結義に准えられる。これらを背景においた時、「信義」は、友情のレベルを超えて命がけで殉ずべき理念であることが了解されるのである。「菊花の約」の「信義」もまずはこの文脈で理解されなければならない。もっとも田中則雄「庭鐘から秋成へ―「信義」の主題の展開―」（「読本研究」第五輯、1991年）は秋成に描かれた「信義」のあり方が「愛憐、惻隠の情に基づく情誼的一体感」であるとして、「『水滸伝』『三国演義』等に顕著な信義のあり方に強い関心を抱いた」庭鐘・椿園の描き方とは異なっていると指摘している。しかしながら、兄弟の盟約に基づく信義の範型が、『三国志演義』『水滸伝』にあったこと自体は動かせないはずである。

二　『和字功過自知録』

考えてみれば当然のこととともいえるのだが、実は近世人の読み自体がその〈欲望〉に規定されているために、〈近世的な読み〉であっても一つの解釈に収斂しないのだという可能

性も考えておくべきだろう。もちろん従来も「雅俗」二層の読者の存在は指摘されてきたが、さらに雅の層の中でも、俗の層の中でも、〈近世的な読み〉は案外多様なのではないか。〈近世的な読み〉と称する排他主義を自戒し、「こうも読める」ということを〈近世的な読み〉にも適用してみる試みがあってもよいだろう。このような議論はいささか乱暴なのかもしれない。〈近世的な読み〉が多様であるのは当然だが、その中でもより蓋然性の高い読みを〈近世的な読み〉と想定しているのだという反論を受けそうである。しかしその蓋然性の高さの客観的測定は極めて難しい。多様であることを認めた時に、魅力的な読み（それは〈現代的な読み〉でも〈誤読〉でもない）が浮上するという可能性の方を大切にしたいものである。

〈近世的な読み〉とはテクスト論的な読みではない。なんらかのテクスト外の情報を活用する読みであろう。ここに模索されてしかるべき方法があるように思う。作者の読書歴や師系から材源や思想的背景を探ることは常道的な方法であるが、仮想的に近世の読者を措定して読んでみることも有効な方法ではないか。同時代評があれば理想的だが、「菊花の約」の場合それもないので、次善の策として同時代に読まれ、「菊花の約」と内容的に重なる記述のある通俗教訓書を参考にして読者を仮設してみようと思う。

『雨月物語』が刊行された安永五（1776）年、大坂の富士屋長兵衛が出願出版（『享保以後大阪出版書籍目録』による）した『和字功過自知録』は、近世の通俗的な教訓書（善書）としてよく読まれ、版を重ねたものである（ただし富士屋（野村）長兵衛版は未見）。版元の富士屋長兵衛は『雨月物語』を出版した京梅村判兵衛・大坂野村長兵衛のうちの後者。国会図書館所蔵『雨月物語』（梅村判兵衛・野村長兵衛版）に付載された「文煥堂（野村長兵衛）」の広告にはこの「和字功過自知録」が掲げられる（『上田秋成全集〈第七巻〉』「解題」三八四頁に写真あり）。読者が重なっていても不思議はない。この書を読んでいる者に『雨月物語』はどのように映るだろうか。

本書は明の袁了凡の著した善書『功過格』の日本版である（酒井忠夫『中国善書の研究』、弘文堂、1960年）。人が自らの言動を省みてその功過（善悪）を点数化し、それを日録するためのマニュアルというべきものである。功過がそれぞれ分類され、箇条書的にならべられて条ごとに点数化されている。見出しは、「善門　忠孝類」「過門　不忠孝類」、「善門　仁慈類」「過門　不仁慈類」、「善門　雑善類」「過門　雑不善類」と、功過各三類（計六類）が立つ。たとえば冒頭の「善門　忠孝類」を見ると、

一　父母につかへうやまひて、心をよろこばしめよく養ふ一日一善
　　○ことさらによろこび、或は楽しみ給はゞ、一事を別に一善

とある。

「菊花の約」と重なってくるのは「仁慈の類」である。その冒頭から次のようにある。

一　人の一命をすくふ百善
一　重病をかいはうし、病人の心に満足せしむ一人十善
　　かるき病は一人五善　○薬をほどこす一段二善
　　○無縁の病人をつれかへり、やしなひかいはうす一人三十善

左門は無縁の重病人を介抱し、薬を施し、病人に安らぎを与えた。まさに「菊花の約」の状況とぴったり重なる。『和字功過自知録』の読者からみれば、左門は模範的な善行を行っているのである。ちなみに「忠孝類」には、「一　兄をうやまひ弟を愛す一事二善〇異父母の兄弟は一事二善」とあって左門と宗右衛門の交わりを彷彿とさせるし、「雑善事」には、「〇身命をすてて、義をまもる百善」とあり、「雑不善事」には、「一　約束を負く小事一過大事十過」と、この一篇の主題ともいうべき項目がある。『和字功過自知録』の読者に「菊花の約」の主役たちは、功を積み、過を忌避する、まれに見る善行の模範的人物として映るに違いないだろう。実は『和字功過自知録』の病人への対応の記述が「菊花の約」の左門に似ていることを最初に述べたのは、中山右尚であった。中山は「作者」(鹿児島大学文芸部、刊年不明、1980年と推定）というサークル誌に寄稿した「和字功過自知録」という文章の中で、わずかにこれに触れているが重要な指摘であった。

どんなに観念的で偏奇な人物だったとしても、信に殉じ、義を全うした宗右衛門と左門に対し、『和字功過自知録』の読者がこれを迂愚であるとか、現実対応能力がないなどと思うはずはないだろう。現実の中で理念を貫く困難があるゆえに、「信義」を貫く美しさがあると、彼らは認識していたはずだからである。『和字功過自知録』の読者は、おそらく先述の潭北教訓書の読者層とほぼ重なるであろう。

三　「軽薄」

それにしても「信義」を守ることが宗右衛門の自刃をもたらし、左門による赤穴丹治の斬殺という復讐そして逐電という事態を生むことになったことも確かであり、それは現代の眼から見れば悲劇には違いない。それゆえに左門や宗右衛門に対する批判的な読みが続々と登場したわけである。批判的にとは言わないまでも、二人の「信義」を賞賛するような読みは少なくともほとんど見られなくなってきた。だが、その批判の根拠は、左門の観念的思考や不条理な復讐そして逐電、さらには母親への不孝などであり、宗右衛門への批判にいたっては、軍略家としての言動への疑問が主なもので、いささかためにする議論の感なしとしない。松田修「「菊花の約」の論―雨月物語の再評価―」(「文芸と思想」二十四号、1963年）以来、テクストを細かく読んで、左門や宗右衛門の言動に矛盾を見出したり、不遜や謀略を嗅ぎ取る論が跡を絶たない。そのことと関わるのが、「軽薄の人」の問題であろう。周知のようにこのテクストの冒頭には、

> 青々たる春の柳、家園に種ることなかれ。交りは軽薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹くに耐めや。軽薄の人は交りやすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染れども、軽薄の人は絶て訪う日なし。

と、原拠「范巨卿鷄黍死生交」冒頭部「結交行」を改変した格調高い文章があり、末尾には、尼子経久が逐電した左門を追わせなかったことを述べた後、

咎軽薄の人と交はりは結ぶべからずとなん

と冒頭部を繰り返すような文章がある。原拠にはこれがなく、なぜ秋成がこれを新たに付け加えたのかが謎として残され、さまざまな解釈が生じている。またそれに関連して「軽薄の人は誰か」という議論が、先の左門や宗右衛門に対する批判的な見方と関わって盛んである。1965年以前の説は金井寅之助「「菊花の約」の構成」「松蔭短期大学研究紀要」第七号、1965年）に「代表的な」四説に分類整理されている。その中で挙げるべきは二説で、第一は、冒頭結語は赤穴丹治の話と結びつき、主題とずれているとする鈴木敏也（『雨月物語新釈』、1916年）の説、第二は、赤穴宗右衛門と左門の信義に対して逆説的においたのが冒頭結語であり、これにより宗右衛門が約束を破りはしないかという不安を高め、その不安を解消させることで強い感銘を与えるという読みを示した重友毅（『近世国文学考説』、1933年）の説である。他の二説（中村幸彦・鵜月洋）および金井説は、この二説の上に立っているとしてよい。

研究史の流れを変えたのは、前掲の松田修論文であった。左門宗右衛門衆道説として著名な論文だが、さしあたって重要なのは松田が、宗右衛門の「策士性・利害打算性」と、左門の「信義の士であ」るとともに「偏奇であり迂愚である」人間性を指摘したことである。これが後の「軽薄の人」論争に影を落とす。全部には触れ得ない。任意にいくつかの説を検討する。

冒頭結語の「軽薄の人」議論に再び火をつけたのが木越治である。木越は「「軽薄の人と交わるべからず」という教訓に冒頭部と末尾をはさまれたこの物語が、もしも理想的な人物による理想的な物語として書かれていたならば、それはごくまっとうな教訓としての効果を発揮した」だろうが、「この物語は」「人物も状況もきわめて特殊なものとして書かれて」おり、「ここに描かれている「信義」とは、「信義」の観念にとりつかれ、「生」のすべてをその一点に凝集しうる者、あるいは自らに課せられた「信義」を果たすことにより他に自己の生存の場所を見出しえない者以外には実現不可能なもの」であり、「冒頭部と結語に含まれる教訓はほとんど色あせ、無意味化され」るという。その結果「否定されるべきはずの「軽薄の人」の現実性がかえってあざやかに印象づけられることになった」としている（「「菊花の約」私案」『秋成論』ぺりかん社、1995年。初出1984年）。矢野公和は「「軽薄の人」との交わりを戒めた起・結の二句の意味するところは、こうした（濃密な交わりを避ける方がよいという―飯倉補）大人の論理からする、左門又は彼に応えて逝った赤穴に対する批判だったのである」（『雨月物語私論』岩波ブックサービスセンター、1987年、初出1985年）という。小椋嶺一は「この物語は、一見まことしやかに見える審議という観念的美に装われた、その内奥に見え隠れする軽薄をこそ描出していたのであった」とし、「丈部左門と赤穴宗右衛門の交りこそ軽薄そのものであった」（「「菊花の約」論―信義から軽薄へ―」『秋成と宣長』翰林書房、2002年。初出1986年）と断じる。井上泰至は末尾の一文を読んだ読者にとって「もはや、冒頭の「軽薄の人」は他人ではない。純粋な信義の実態を向こう側のこととして感激していた者も、この繰り返しと「となん」という含みのある表現により、誰が自信をもって自らを「軽薄」でないといいきれるのか、信

義を実行することはかくも困難なことなのか、と思い知らされる。美談・悲話から反転、読者に突きつける言葉の刃こそが、原拠の結末を大きく改変した理由だった」と、軽薄の人＝読者説を唱える。(「軽薄の人は読者なり―「菊花の約」を読む」『雨月物語論』笠間書院、1999年。初出1998年)。

だがこれらの議論の中で、「軽薄」とは何かが十分吟味されていただろうか。上述の諸々の論は、「約束を守ら（れ）ない」＝「軽薄の人」という図式で捉えているように見えるが、果たしてそれでよいのであろうか。

「菊花の約」においては、「軽薄の人」は「信義の人」の対義であるようだ。享保二年版『書言字考節用集』は「軽薄」に『文選注』の「勢ヲ逐ヒ義ニ背キ志矜夸ニ在ヲ軽薄ト曰フ」（原漢文）を引用しているが、このニュアンスに近いといえよう。しかし〈近世的な読み〉をする当時の読者にとってはどうであったか。

まず、秋成自身が「軽薄」をどう用いているかを、晩年の著述だが『茶痕酔言（異文）』六（『上田秋成全集』第九巻所収）から見ておこう。

出雲の国の山僧、都に遊びて、我煎品を撰（えらぶ）と聞（きき）て、人によりて国産の茶を贈らんとて、先六韻を寄（よせ）らる。「不老多奇勝、園春瑞草生、候帷須緑嫩、採那必旗鎗、気与巌僧潔、味留雲脚清、兎山真可敵、鹿谷莫能当、換骨嘗三椀、忘眠到四更、非縁君一顧、安取大方名」。かく聞えて、今や五年を歴（ふ）れど、茶は餉（おく）らず成ぬ。同国の僧にあひて、談此事に及ぶ。僧後に本土に帰りて告（つげ）たりけむ。又一僧、言をつたへて来たる。「鰐淵の茶、十余里の峭嶮を隔て得やすからず。今年のうち必（かならず）おくらん」とぞ。「実にさる事有（あり）し。忘却の疎情、言を企ずとやいはむ」と一咲して止ぬべきを、今や贈らずともあれかし。文人の軽薄、此ごとき人多し。

出雲国産の茶を贈ると約束した僧が、詩のみ贈って来て現品を五年も贈ってこず、言い訳を寄こしてきたことを「文人の軽薄」と斬って捨てている。だが正文ではその後贈って来たことを記し「佳茗也」としている。掲出した異文では「文人の軽薄」をいうべくそのことを省略したと思われる（正文には「軽薄」の語はない）。つまり秋成の「軽薄」観を知るに都合のいい文章だということになろう。この場合の「軽薄」とは、約束を守らなかったことではなく、約束を忘れていたことを何かと言い訳する態度をいうのである。

秋成の戯作『書初機嫌海』（天明七年〈1787〉刊）巻之中では「さて学文の風も三十年前とはちがうて、一家の見識を立つる人なく、口には素難仲景の軽薄弁でうりつける事也」という一節があるが、ここでも実質が伴わない口だけ達者な人間を「軽薄弁」と称している。

こういった秋成の「軽薄」観は実は近世には一般的なものであったと思われる。

又よく礼義を知りて慇懃をもつて人を敬ひ、心立柔かに結構人なりと誉むる者は、皆馬鹿慇懃を尽し、表裡軽薄の諂ひ者なり。とにもかくにも内外揃ひたる誠の人は無き

ものなり。　（寛文ごろ刊『浮世物語』巻三、『浮世物語』には「軽薄」の用例多し）

…初知行三百石、今に立身なく、馬壱疋、若党三人、世並にかゝへ、身に奢なく、軽薄いはず、一子もなく、養子もせず、我一代の覚悟、律義千万に物がたき、むかし作りの男なり。　（貞享四〈1687〉年刊『武道伝来記』）

今俗に,威儀かろがろしく徳うすき者を軽薄者と云。
（元禄十二〈1699〉年成『諺草』巻之五）

是は結構なおたばこかな。よいかほりで御座ります」と、怖さに軽薄を申せば、
（宝暦二〈1752〉年刊『当世下手談義』巻一の一「工藤祐経が霊、芝居へ言伝せし事」）

さしもの道千気を呑まれて、しばし挨拶も出ざりしが、漸胸のおどりをしづめ、熟手の筋を詠め、先軽薄の虚笑して、　（同巻三「足屋道千、売卜に妙を得し事」）

少の間、御庵室の軒下をおかしなされて下されませ。一樹の蔭、一河の流も」と、古事いふて、軽薄の虚笑するは、渋張の笈、背負たる坂東巡礼。
（宝暦十二〈1762〉年刊『教訓差出口』巻四）

其名を愚医国といひ、又薮医国ともいふ。此国の人皆頭を丸め、折に惣髪なるもあり。学問を表にかざり、人の病を直す事を業とすれども、近年甚下こんになり、書物を見れば目の先くらみ、尻の下より火焔もえ出、暫時も学問する事ならず、只世間功者にとばかり心懸、軽薄を常とし、てれん・ついしやうの妙術をきはめ、羽織は小袖より長く、竹輿のすだれはいき杖よりもふとし…（宝暦十三〈1763〉年刊『風流志道軒伝』）

「偽りのなき世なりせばいかばかり人の言の葉嬉しからまし」されば卵の方と倡妓に実なきのみならず、仏法に方便あれば、軍法に計策あり。浮世に追従軽薄あれば、参会に座なりおはむきあり。虚言あれば、てれんあり。偽あれば、手くだあり。
（明和五〈1768〉年刊『根無草後編』一之巻）

文の詞も古きを襲ひて肺腑より出るとも見えず。其求る所美色に非ず美産にあり。俗情軽薄誠とすべからず　（天明六〈1786〉年刊『莠句冊』第三話）

これらを通覧しても、「軽薄」の語が誠実さにかける言葉だけの追従、表面的な媚び諂いというイメージで近世人には捉えられているだろうと推定される。そういうイメージを

抜きに「軽薄の人」を考える方が困難ではないだろうか。だとすればそれに相応しい人物は、赤穴丹治を含めても、「菊花の約」の中には見出しがたい。つまり「軽薄の人」に相当する人はいないとしなければならない。といって、「軽薄」が読者に突きつけられているというような峻厳な読みをするのもまた飛躍がある。たしかに約束を守れないことは人間にはあるが、それがつまり「軽薄」だということにはならない。守れなかった時に口先で誤魔化すような人が「軽薄の人」であろう。宗右衛門のような状況で約束を守れないからといって、近世人はその人を「軽薄」だと責めることはないだろう。

四　「菊花の約」の読み

私の考える本話の〈近世的な読み〉を述べてみよう。現実に生活を営んでいる普通の町人の立場からいえば、左門と宗右衛門に対して「そこまでしなくても」と思うかもしれないが、本話はあくまで「信義」の物語である。そういう現実離れした理念が実現された話として、私の仮設した『和字功過自知録』の読者はこの物語を読んでいたと考えてよいのではないだろうか。

約束を守るという一事に存在を賭けた二人にとって、「信義」はそれ以外のあらゆる世事に優先する。そして彼らは「同年同月同日」に死にたいという願望を持っていたに違いない、と読者は思っただろう。丹治を斬ったことも、この「信義」の物語を読む態度から言えば、決して疑問をはさむべき事ではないはずである。現在からみれば偏奇で極端な「兄弟」愛も、『三国志演義』などにみる「兄弟」愛を参考にすれば違和感なく了解されるであろう、盟約を交わした「兄弟」としては理屈ぬきの「信義」の表現であった。理性を失うほどの衝撃・哀しみがそうさせているのであって、理屈で彼を責めることなど『和字功過自知録』の読者ならしないだろう。左門の「信義」が実現される場がなければ、この物語は十全ではない。復讐によってそれが果たされるのは、「信義」の物語の文法として当然の帰結である。実際、尼子経久が「信義」に感じて左門を追わせなかったのも、そういう理屈ぬきの「信義」をよくわかっているからに他ならない。

左門にとって復讐を果たすことは「信義」の一部であり、復讐が完了すれば、死こそが彼の唯一の選択肢であったはずである。左門はもとより死を覚悟していた。それゆえにこそ母を佐用の家に頼んだのである。母を捨てて宗右衛門との「信義」に己の存在を賭けることにした左門は、そうすることが親不孝であることは百も承知、佐用の家に後を頼むことが彼のできる精一杯のことだったのでる。必ず帰るという母との約束もそれが守られない約束であることは、母子とも十分わかったうえでのことと読むべきだろう。

一部の論者の言うように左門や宗右衛門を「軽薄の人」であるとすれば、その「軽薄の人」を作中人物尼子経久が讃えるというまことに判りにくい筋立てを秋成が作ったことになり、到底与しえない考え方である。

末尾の一文はしたがって、左門も宗右衛門も「軽薄の人ではなかった」ことを讃えている文でなければならない。つまり、「軽薄の人と交わってはならない」というけれども、本当にその通りで、左門は口先だけの「軽薄」の人と交わらず、「信義」の人宗右衛門と交わって本当によかったと、また宗右衛門もまた「信義」に答えた左門のような人と会い「信

義」に殉じるという生を全うしたことは実に立派であるとしなければならないだろう。そこに違和感を覚えたり、「そこまでしなくとも」と思った読者も近世には確かにいたかもしれないし、秋成自身もそうであったかもしれないが、そういう読みを秋成が読者に求めていたとは思えないし、読者もまた彼らを立派な人物として敬意を持って読んでいただろう。

では左門はなぜ逐電したのか。いうまでもなく、左門は自刃する境遇を確保するためにその場を去ったのである。生き永らえて逃亡漂泊を続ける気もないし、母のところへ帰る気持ちもなかった。母との約束を守らないことになるではないかという意見もあるわけだが、すでに左門は母との永久の別れを覚悟している。

重要なのは、前述したように、尼子経久が「兄弟信義の篤きをあはれみ」左門の跡を追わなかったということである。経久は左門が自刃の決意をしていることを見抜き、彼自身にその時と場を選ばせるために、彼を追わせなかったのだと解釈するのが妥当な読みではないかと私は思う。この物語の中で、「信義」が絶対の価値観として存在していることが、尼子経久のとった処置で確認できるのである。末尾の一文から立ち上がる可能性のある「信義」なるものへの疑問は、すくなくとも『和字功過自知録』の読者には無縁のものだと言わねばならない。これが現在の私の、「こう読みたい」という〈欲望〉が反映したものかもしれないという危惧を抱きつつ提出する、「菊花の約」の〈近世的な読み〉の試みである。

（補記）本論中、「信義」の用例・考察において、高田明日香「『雨月物語』「菊花の約」論—兄弟の盟に関する考察—」（大阪大学文学部 2002 年度卒業論文）の成果を一部利用している。

（追記）成稿後、稲田篤信『名分と命録　上田秋成と同時代の人々』（ぺりかん社、２００６年）により、小川陽一「軽薄考—明代白話短編小説と善書」（『日用類書による明清小説の研究』（研文出版、１９９５）を知った。白話小説における「軽薄」の用例を検討したもので、本稿と関わるところが多い。